昭和七年六月創刊
廣島女學院報
昭和廿八年十月復刊

広島女学院報
HIROSHIMA JOGAKUIN NEWS

第 195 号　2022年2月10日
学校法人 広島女学院発行
〒732-0063　広島市東区牛田東四丁目13-1

広島女学院の大切なもの

広島女学院中学高等学校校長　渡辺　信一

2016年に、本校に中村哲さんが講演に来てくださいました。中村さんは、アフガニスタンで苦しむ人々の支援活動をなさいました。砂漠を緑豊かな農場に変えた事は、まさしく奇跡です。先生の著書「天、共に在り」からの文章を紹介いたします。

『ダビデの詩は、数千年の時を超え、朽ちない事実を伝える。

主はわが牧者なり　われ乏しきことあらじ。
主はわれをみどりの野にふさせ、憩いの汀に伴いたもう。
たといわれ死の陰の谷をあゆむとも、禍を恐れじ。
汝、我と共にいませばなり。
かならず恵みと哀れみと我にそいきたらん。　（詩編第二三篇より抜粋）

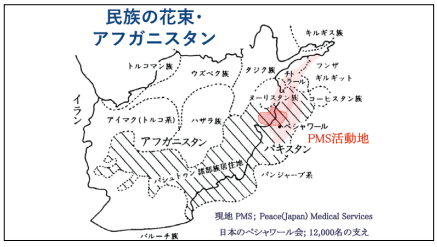
小高い丘から望むと、砂漠に囲まれる緑の人里は、壮大な天・地・人の構図だ。厚い防砂林の森が、砂漠と人里とを、くっきり分けている。過酷な自然の中で、人間は身を寄せ合って生きている。生殺与奪の権を持つ大自然を前に、つつましく生命を営む様子に、改めて、「天、共に在り」という実感と、安堵を覚えるのである。自然は喋らないが、人を欺かない。高く仰ぐ天が、常にあることを実感させる。絶望的な人の世とは無関係に、与えられた豊かな恵みが在ることを知らせる。』

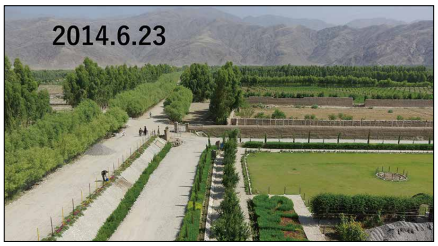
コロナ禍の2年間は、今まで成長することのみに集中してきた世の動きを変えようとしています。強い者が他の者を押しのけ、さらに強くなり、弱い者が顧みられない。それは、競争の原理からいうと当然なのでしょうが、そこには、すべての人が安心できる幸せはありません。

中学高等学校での学びの根幹にあるのは、「自分を愛するように、周りの人を愛しなさい。」というキリスト教の教えです。本校の特色教育である、平和教育、人権教育、グローバル教育はもちろんですが、毎日の授業やクラブ活動も「あなたは尊い」というイエス・キリストの愛が礎にあります。何ができたかということよりも、今何を大切に生きているのかということが問われるのです。

「自分は変われました。周りの人に支えられました。」と、卒業を前にした高校3年生が言います。子どもたちは、未来を創る希望です。

（現在、アフガニスタンは、大変困難な状況であることを添えさせていただきます。）





中村先生講演スライドから

中村哲先生講演会（2016年9月）

大学 University

書籍『英米文学者と読む「約束のネバーランド」』を出版して

2020年8月に集英社新書より『英米文学者と読む「約束のネバーランド」』を出版いたしました。本書は「週刊少年ジャンプ」で連載された漫画『約束のネバーランド』を英米文学の観点から読み解いた一種の考察本です。

孤児院で暮らす子供たちが、実は自分たちは「鬼」と呼ばれる異形の存在の食糧として飼育されていたという真実を知り、自らの命と自由をかけて脱走を企てるというこの物語は、一見すればサスペンス・アクションというエンターテインメントなのですが、よくよく読み込めば、『不思議の国のアリス』や『ピーター・パン』といったイギリス児童文学や階級制度、キリスト教やユダヤ教などの宗教とも深く結びついた物語設定やキャラクターに満ちています。

漫画という媒体でありながら、「文学」と呼んでも過言ではないこの物語の深みに魅了され、文学研究者の視点から、大学で学ぶ英米文学や文化、キリスト教に関する知識を応用することで、物語をただ読むだけでなく、より深い意味やシンボルを「読み解く」楽しさを伝えたいと思い、本書を執筆いたしました。

「漫画は読むけれど、文学は難しそう……」と思う高校生や大学生を主な読者として想定していますので、ぜひお気軽に手に取っていただき、物語の「深読み」の楽しさに触れていただければ幸いです。

（国際英語学科 准教授　戸田　慧）

『英米文学者と読む「約束のネバーランド」』／集英社新書

神楽の笛の音 ―伝統文化を受け継ぐ―

2021年10月21日開催の木曜日チャペルで、広島県内の神楽団で活動する2年生の坂本奈水さんと松本初花さんが神楽の笛を演奏しました。また、同学年の川口菜月さんが坂本さんに、野口春香さんが松本さんに、インタビューし、そこから伝統文化の継承について思い、考えたことを発表しました。川口さんは、少子高齢化が急激に進む日本社会にあって、女人禁制の壁を乗り越えて女性も神楽という文化を支え継承していきたいという、坂本さんの思いを伝えるとともに、男女が協力し合って伝統文化を未来につないでいくことの大切さを訴えました。

また、野口さんは、競演大会への参加や海外からの観光客に向けての発信をはじめとする、松本さんの神楽団の一員としての様々な活動にふれ、若い世代が伝統文化の継承に積極的に参画し、行動することの大切さを訴えました。コロナ禍の中、地域の伝統文化は厳しい状況に置かれています。川口さんと野口さんの発表は、文化を次代につなぐには、若い世代の地域に根ざしジェンダーの壁を越えた活動が大切であることを、再認識させてくれました。また、ゲーンスチャペルの凛とした空間に流れる坂本さんと松本さんの笛の音は、伝統文化の価値と文化の継承に携わる若い力の頼もしさを、私たちに実感させてくれるものでした。

（日本文化学科 教授　植西　浩一）

坂本さん・川口さん

松本さん・野口さん

書籍『解きながら学ぶ 構造力学』を出版して

2021年9月に、学芸出版社より書籍『解きながら学ぶ 構造力学』を上梓しました。

建築の構造は、厳しい自然環境から生命や財産を守るとともに、建築内外の環境を繋ぐことを可能にします。一方で、建築の多様化・個別化が進む現代においては、力学的な視点から素材や構法の可能性を如何に引き出すのかという課題にもまた着眼が置かれています。ここで言う構造力学とは、構造モデルを用いて建築物に荷重が作用した際の反応を解析する手法であり、本学では、建築士課程の必修授業である「構造力学Ⅰ」や「構造力学Ⅱ」において学修します。ただし、断面寸法や崩壊機構などの多様な項目が相互に関連することから、難解に感じる学生が多いのも事実です。そこで本書では、建築に作用する力や各種設計条件への適応方法などを体系的に示し、各項目のつながりを重視した解説を行うことで、建築に関わる上で必要となる力学の基本的知識を容易に習得できるようにしています。加えて、近年急速に導入が進められているICT教育にも利活用できるように、各頁の問題や図表をQRコードよりダウンロードできるようにしています。これによって、PC・タブレット端末によるノートや独自問題集の作成、オンラインによる共同作業など、より多様な学修が可能となり、効率や質の向上にもつながるのではないかと考えています。

初学者の一助となれば幸いです。

（生活デザイン学科 准教授　塚野　路哉）

『解きながら学ぶ構造力学』／学芸出版社

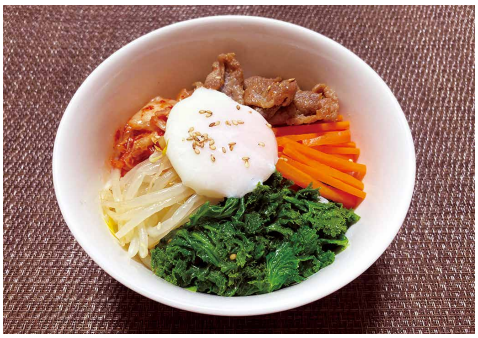
学生たちと学ぶ日々から

管理栄養学科では、探求心を持ってやり抜く力と食を通して人に寄り添う力を養うために、1年次から授業だけでなく課外活動でも食や健康について学ぶ機会を設けています。食育サークルを中心とした活動では、味噌づくりやレシピ開発などを行いました。味噌づくりはJA広島市のご協力により、樽への仕込み作業を一から体験しました。蒸した大豆をつぶしたり塩や米麹を混ぜたり捏ねたりする作業は楽しく、味噌への愛着が増すのを感じられました。約6カ月の熟成期間を経て風味豊かでコクのある味噌ができあがり、日本の発酵食品の魅力を再発見する機会となりました。

また、企業と連携したレシピ開発では、「しまなみリーフ®」と呼ばれる因島産の葉物野菜を使った料理を考案しました。さわやかな辛味と見た目の美しさ、栄養的な特徴を活かした様々なアレンジ料理が完成し、どれも家庭で作りやすく、野菜が苦手なお子さんにも食べやすい料理になっています。現在は、第2弾を検討中です。どのようなレシピ集が完成するか楽しみです。

4年生は約1年間をかけて卒業研究に取り組みました。研究対象は、遺伝子や細胞、食品を扱う基礎研究からヒトを対象とした実践研究まで多岐にわたり、からだの免疫機能、食品の安全性・機能性、おいしさのメカニズム、スポーツ栄養、食物アレルギー、介護食、食育、食環境など多様なテーマで行われました。いずれも人々の健康を支える新しい知見や技術が検討され、熟考を重ねたプロセスを感じられる大変興味深い内容でした。

（管理栄養学科長　市川　知美）



しまなみリーフ®を使った料理「ビビンバ」

コロナ禍での子育て支援広場

本学では、2016年より幼児教育心理学科特任教授であった鈴木道子先生のご指導のもと、未就園児の親子を対象とした「バァバの子育て支援広場」を開催し、学生はボランティアとして参加してきました。

学科改組に合わせて「地域子育て支援セミナー」を開講、学生が主体となる広場として再始動しました。昨年は残念ながら開催を断念しましたが、今年は感染対策を徹底し、全3回の広場を開催することができました。

第1回（11月4日）
「もりのおんがくかいに、ようこそ」
第2回（11月25日）
「動物たちといっぱいからだを動かそう！」
第3回（12月23日）
「サンタさんになってプレゼントを運ぶよ！」

0歳児を含む「未就園児」の姿を想像して遊びを考えたり、保護者に声をかけたりすることは、学生たちにとって簡単ではありませんでしたが、回を重ねるごとに活動内容も充実し、参加者も徐々に増え、のべ31組77名の親子にご参加いただくことができました。

参加者からは「学生さんからたくさん声をかけてもらって、子どもも楽しそうでした」「未就園児がいけるイベントが少ないので、頻繁に開催してほしい」との声をいただきました。学生のふり返りでは、「年齢や発達に応じた活動内容や環境設定」「保護者への対応」について、実践を通じて学ぶことができたという意見が多くありました。今後とも地域に愛されるイベントとなるよう、学生と共に精一杯取り組んでまいります。

（児童教育学科　中村　勝美）

トナカイさんと一緒にプレゼントを運びます

2021年度 秋季宗教強調週間報告

今季は特別講師として、この春に広島女学院院長・大学学長としておいで下さった三谷高康先生をお迎えすることがかないました。

昨年来継続するコロナ対策を前提としたプログラムとしては一歩前身し、ビデオ配信だけでなく講堂への参集も行うことができましたが、広島県の対策状況を踏まえた本学の活動指針の緩和にあと数日届かず、講堂の収容人数を5分の1以下とせざるを得ませんでした。せっかくご講演くださる三谷先生には申し訳ないことでしたが、目の前にいる（人数としてはわずかな）学生にも、配信を通してメッセージに触れる（大多数の）学生にも、等しく語りかけてくださる熱意のこもったご講演でした。

2021年10月12日（火）に『1％の重み』（ルカによる福音書15章4～6節）と題して語られた「キリスト教の時間」での説教では、大阪駅の「チカンはアカン」という掲示と十戒の人間理解に不思議な共通点があることの指摘から始まり、M.ブーバーの「我と汝」に触れつつ、一人ひとりに対して忍耐強く注がれる神のまなざしについて丁寧に教え示して下さいました。

翌日、10月13日（水）には宗教強調週間特別講演会として、『あるキリスト者のあゆみ』と題してお語り下さいました。ご講演では、1917年に宣教師として中国に派遣されて以来、貧しい人々、特に子どもや女性の自由や自立のために奔走した清水安三の働きが紹介されました。清水は貧民街として知られた北京の朝陽門外に崇貞学園を創立し、日本、中国、朝鮮半島の子どもたちがそれぞれの言葉で学び、それぞれの文化を誇りとすることができる教育を目指したといいます。その後、アメリカ留学を経て帰国し桜美林学園を創立するに至ります。彼の目指し、実現した教育こそ、真の意味でのグローバル教育でした。

二日にわたるご説教とご講演から私たちは、経済的合理性や自己責任論などのもっともらしい理屈ではなく、「神の愛」をこそ土台とした人間関係や社会に向けて、豊かな展望や励ましをいただくことができました。

なお、動画配信はライブ視聴とアーカイブ視聴を合わせて両日とも約1,000回を数えており、これまでの最多となりましたことを、感謝のうちにご報告いたします。

（大学宗教委員長　澤村　雅史）

中学・高校 Junior high school & High school

中2チャレンジキャンプ

10月8日(金)、一昨年ぶりに芸北の豊かな自然の中でチャレンジキャンプを行いました。今年は新型コロナウイルス感染拡大防止の為、テント泊や飯盒炊爨は実施せず、恐羅漢山登山を行いました。入学以来、なかなか学年行事を実施できなかった学年なので、生徒たちにとっては本当に待ちに待った学校行事となりました。様々な活動時間が感染対策により減少している中での登山は体力的な面でも不安がありましたが、当日まで準備を重ねてきた高校生リーダーに支えられ、無事に恐羅漢登山を終えることができました。

当日は天候にも恵まれ、十月ということもあり恐羅漢はとても気持ちの良い気候でした。生徒たちは久しぶりの学校行事に生き生きとした表情で活動していました。登山はとても大変だったようですが、山中では辛くなった生徒の荷物を周りの生徒が持ってあげる様子が見られたり、しりとりをしながら楽しんで登るグループがいたりと、それぞれ工夫して協力し、励まし合いながら一歩一歩進んでいました。

下山した生徒の表情は、疲れもありましたが達成感にあふれていました。そして中2をリードしながら傍で見守ってきた高校生リーダーも、無事に下山出来た安堵感と充実感に包まれている様子でした。

活動を終えて帰校し解散式を行った際には、高校生リーダーと楽しそうに一日を振り返って話をする中2の姿が見られました。生徒の感想からは、出発前は不安があったけれどグループで励まし合いながら活動できたことで仲間との絆が深まった嬉しさや、日常では味わえない自然や山頂での景色に感動したこと、そして高校生リーダーへの感謝など、一日の活動ではありましたがたくさんの発見と学びがあった様子でした。それらを糧に、これからの学校生活をさらに充実したものになるよう過ごしてもらいたいと願っています。

(チャレンジキャンプ委員会　中元　深雪)

今年度の広報活動

コロナ禍ではありますが、感染防止策をとりながら広報活動を模索・実施してきました。7月23日(金)に行われた「夏のオープンスクール　るんるん♪女学院」、10月2日(土)・16日(土)に行われた「秋のオープンスクール」では、中高生有志からなる「女学院アンバサダー」たちが中心となって企画・運営を行い、女学院クイズや校内ツアーなどで活躍しました。また、授業体験・部活体験などでも、女学院生が小学生をうまくサポートしていました。事後アンケートでは、一生懸命小学生をもてなす女学院生の姿が印象的だった、との声を多数いただきました。

また、今年度から新しい取り組みとして「ミニ学校見学会」を定期的に行っています。参加人数を10名程度に絞った少人数での校内見学・学校説明は大変好評です。また、実際の活気ある授業風景や部活動のようすも見ていただくことで、より女学院の良さをお伝えできているようです。オンラインでの広報活動も有効ですが、実際に学校に来ていただいて女学院生の姿を見ていただくこと・女学院生と話していただくことが一番の広報活動だと実感しています。

広島女学院なりきりすごろく

また、遊びながら女学院での中高6年間の行事や学校生活を疑似体験できる「広島女学院なりきりすごろく」が、第42回広島広告企画制作賞(グラフィック3平面特殊印刷の部)の金賞をいただきました。

(広報部長　濵岡　由希子)

高円宮杯 第73回全日本中学校英語弁論大会

国内最大の規模で、歴史も長い大会に今年も本校生徒が参加しました。地区大会で優勝した中3の鄭世希さんは中央大会(約150人)に臨み、決勝予選大会も突破して決勝大会(27人)に進みました。今回はオンライン形式で開催され、事前に送ったスピーチの動画が審査され、鄭さんは見事1位という結果でした。併せて、「ワールド・ファミリー賞」も受賞しました。(本校の優勝は12年ぶり、2回目です)

スピーチのタイトルは"Say My Name"で、"What's your name?"という問いかけから始まります。「簡単な質問ではあるが、42万人の在日コリアンにとっては、そんなに単純な問題ではない」と続きます。鄭さん自身の祖父や父の世代では差別のために、「通名」を使う必要があり、それは現代でも同じ歴史をたどっていること、そしてこの問題を解決するために中学生の自分ができることを、実体験を交えて紹介し、互いの文化をより深く知ることが差別を減らすことにつながると提案しています。スピーチでは韓国の印象に関する統計資料や元国連事務総長の潘基文氏の言葉を引用するなどの工夫も見られます。スピーチの最後は、「あなたの名前は何ですか。私は鄭世希。日本生まれの韓国人。よりよい明日のために、一緒に歴史を変えることができたらと願っています」と結んでいます。

講評のひとつに「中学で習うほぼすべての英文法が使われており、表現に偏りがありません。豊かな表現で単調さを回避し、完成度を高めています」とあり、

英語面でも高い評価を得ています。鄭さんの表現は見方によっては控えめですが、とても自然に、しかし堂々としていました。英語の絵本をきっかけに、小学生のころ英語に興味をもち、中学生になってからはラジオの英語講座をはじめ日ごろの学習により英語力をつけています。高校生になっても英語を使って様々なことにチャレンジすることを期待したいです。

（学院報編集委員中高係　抹香　加緒理）

キリスト教強調週間（11月15～20日）

主題「無くてならぬもの～コロナが教えてくれたこと～」、主題聖句「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。」（創世記1章31節）、講師に奥田知志先生（日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師）をお迎えしました。奥田先生は、北九州市でこれまでに3600人以上のホームレスの人々を自立に導いたNPO法人抱樸代表で、NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」「こころの時代」などに出演し、ホームレス支援だけでなく、生活困窮者、社会や家庭に居場所のない若者や子どもたちのサポートなど、その活動は多岐にわたっておられます。

講演では、「コロナ禍で私たちがもう一度再確認させられた『無くてはならぬもの』は"命"。でも、現実には"意味のある命"と"意味のない命"があるかのような社会になっている。聖書では神が世界を創造された時、すべてのものを良しとされたとある。それは、『命そのものにまず意味がある』という宣言だ」と話されました。

昼食後の講師を囲む会には、高校チャペルいっぱいの中高生が集まり、次々と熱心な質問が出ました。

学年別活動では、「隣人と共に生きる」ことをテーマに、社会のさまざまな分野の講師の先生と出会い、具体的実践活動を行いました。

21日（土）の閉会礼拝（放送）では、各学年の生徒代表が感想を発表し、それぞれが得たものを分かち合いました。

クリスマス諸行事

中学讃美歌コンクールは、昨年はコロナのために学年ごとの発表会に替えましたが、今年は十分な間隔を空けマスク着用の上で実施することができました。クラス一同が心を合わせた美しいハーモニーと共に、クリスマスの喜びや恵みが深く心に沁みるこの行事の大切さを改めて思わされました。

中学クリスマス礼拝は、全体での合唱はまだ見合わせて、YWCA部のハンドベル、合唱部の合唱、放送部の聖書朗読に続いて、片柳弘史神父（宇部カトリック教会）よりメッセージをいただきました。片柳神父は、マザーテレサとの出会いを通して、「愛するとは、苦しんでいる人を見たら放っておけなくなること」だと語ってくださいました。

高校クリスマス礼拝は、昨年かなわなかった恒例のハレルヤ合唱を実現するため、上野学園ホールを借り切って行われました。ゲーンズホールの三倍定員の音響効果抜群のホールいっぱいに、吹奏楽部、オーケストラ同好会の生演奏で、全校生徒による力強いハレルヤが響き渡りました。宗教委員の司会、放送部の聖書朗読、音楽部の合唱、奏楽などをそれぞれ生徒たちが担当し、塩見和樹牧師（日本キリスト教団広島観音町教会）より、クリスマスに灯す4本のろうそくの光は、迷い悩む私たちに、希望と平和と喜びと愛を与えるためにこの世に来てくださった救い主イエスの思いを表しているというクリスマスのメッセージをいただきました。

夜の**女学院クリスマス**は、今年は一般公開は控え、在校生・保護者、卒業生、受験を考えている小学生とその保護者に限り事前申し込み制で実施しましたが、予想を超える多数の方がご参加くださいました。高校宗教委員・高校放送部・中高YWCA部が協力し、片柳弘史神父のメッセージを通して、神様の愛を隣人と共に分かち合うクリスマスを多くの方々とお祝いすることができました。

クリスマス礼拝では、この1年間の恵みを感謝し、その恵みを助けを隣人と分かち合うために、献金を捧げ、NGOや福祉施設などにお送りしています。中高生・教職員・女学院クリスマスの席上献金を合わせて416,627円の献金が捧げられ、コロナ禍で私たちよりいっそう厳しい状況下にある方々へ、皆様の思いと共に送らせていただきました。

コロナ禍で様々な制限の中ではありますが、そのような暗闇の中でこそ輝く希望の光としてこの世に来られたイエス様の誕生を祝う礼拝をまもられたことを心から感謝したいと思います。

（宗教教育委員会　刀祢館　美也子）

高校クリスマス礼拝

女学院クリスマス

幼稚園 Kindergar

感謝祭 ～豊かな実りをありがとう～

幼稚園では今年もたくさんの秋の実りがありました。春に植えたゲーンス農園のさつまいもを収穫したり、木に実ったかりんでジュースを作ったりと子どもたちと豊かな実りに感謝しながらたっぷりと秋を楽しみました。園庭の田んぼは年長児が耕すところから始め、大きく育った稲を一人ずつ大切に刈る姿がありました。11月には感謝祭礼拝の時を持ち、聖話を聞いたり畑の野菜がたくさん入ったさつま汁をいただいたりする中で、改めて神様から与えられた自然の恵みに感謝することができました。

（幼稚園　河南　玲奈）

園で採れた野菜を囲んで

土の中にはさつまいもがいっぱい

少しずつ丁寧にもみすり

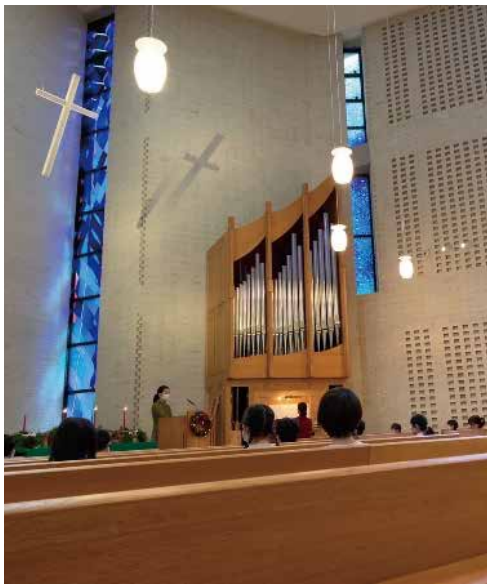
収穫後の玉ねぎ植え

思い思いに過ごした アドベントコンサート

年中組は大学にあるゲーンスチャペルにお出かけして、アドベントコンサートを行いました。大学のオルガニスト玉理照子さんが、クリスマスのお話と一緒にパイプオルガンを弾いてくださいました。初めて足を運んだチャペルで綺麗な音色を聴き、みんなで嬉しいクリスマスの訪れを準備する時を持つことができました。子どもたちの「うわあ」「きれい」という思いが自然に声になり、特別な場所でそれぞれ色々なことを感じて過ごし、良い時となりました。

幼稚園でも、先生たちのバイオリンとピアノ演奏を通して、喜びを持ってクリスマスを迎えられるような心温まるコンサートが開かれました。

（幼稚園　古本　紗也）


パイプオルガンの音色に うっとり

自然と体がリズムを刻むね

ドキドキ！お客さんの前で トーンチャイム演奏

クリスマス

アドベントを迎えた幼稚園では、アドベントクランツに火を灯しながら担任が話すクリスマス物語に耳を傾けたり讃美歌を捧げたりします。そうして一日一日を大切に過ごす中で、子どもたちがクリスマスの喜びを感じ、今まで以上にイエス様を身近に感じている姿が見られます。年長組は、クリスマス礼拝のページェントで、それぞれが選んだ役を神さまから与えられた役として受け取り演じます。緊張しながらも、自分の役に誇りを持って礼拝に臨む姿に感動させられました。子どもたちの成長や繋がりを感じ、イエス様の誕生を共に喜び合うことができた素敵なクリスマスでした。

（幼稚園　橋本　佳南）

神様は、羊飼いに嬉しいお知らせを一番初めに伝えられました

法人 Corporation

「キリスト教主義学校の教育とは」
～2021年度広島女学院全学院研修会報告～

今年度の全学院研修会は、例年各校部の教職員にて構成される実行委員会は設置せず、法人事務局主導で実施しました。またプログラムの内容は学院運営協議会の議を経て、建学の精神であるキリスト教主義教育の再認識をテーマに、キリスト教学校教育同盟理事長・立教大学総長である西原廉太先生にご講演をお願いすることに決定しました。

研修会は学院創立135周年の記念日である10月1日(金)10時30分～11時40分で開催され、西原先生(東京)と各校部の視聴場所をリアルタイムにつなぐオンライン研修の形態で実施しました。当初は西原先生ご来広のもと、教職員が一堂に会する参集型の形態を想定していましたが、新型コロナウイルス感染症の状況もあり、実施形態の変更を余儀なくされました。しかし、昨年来続くコロナ禍にて学院のオンライン環境も少しずつ整備され、各校部の教職員も日々の授業や業務等を通じICTスキルが向上したことで、滞りなく実施できました。

当日は澤村大学宗教委員長の司会により礼拝形式で行われ、中川理事長、三谷院長・学長の開会の辞に続き、西原先生にご登壇いただきました。西原先生からは「キリスト教主義学校の教育とは」と題し、各校部に通じる示唆に富んだお話をいただきました。内容は割愛させていただきますが、神学者であるリチャード・フッカーは『伝統』と『伝統主義』を明確に区別したとのこと。「広島女学院にとって生命線(Life Line)とは何か、『伝統主義』に陥っていないか考えてみてほしい」、各校部とも懸命の努力を重ねている今だからこそ、キリスト教教育の在り方、建学の精神の原点を問い直すよい機会であったと思います。出席者数は168名(大学95名、中高63名、幼稚園10名)。

ご多忙の中、ご登壇いただいた西原先生にこの場をお借りし深く感謝いたしますとともに、教職員皆様のご協力に感謝申し上げます。

(総務課　田村　直也)

新型コロナワクチン 職域接種実施報告

学校法人広島女学院では、在籍する学生、教職員及び学生・生徒園児の保護者の皆様に、新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のため早期のワクチン接種の機会を提供することを目的として、新型コロナワクチンの職域接種を実施しました。接種は武田／モデルナ社製ワクチンを使用し、2021年8月28日から10月23日までの期間の土曜日又は日曜日に計9日間実施し、1042人の方に、合計2065回の接種を行いました。

職域接種の実施に当たっては、牛田校地の産業医である津谷隆史先生の全面的なご協力をいただき、医師免許を有する専任教員や非常勤講師の先生のご協力も得ながら、大学を挙げての体制を構築し対応しました。

経緯は以下のとおりです。

2021年6月3日	文部科学省から大学拠点の職域接種実施についての意向調査
2021年6月25日	厚生労働省へ申請(7月21日接種開始で申請)
2021年6月28日	大学内に準備チーム編成
2021年7月5日	準備チーム全体会議
2021年7月8日	ワクチン接種の仮予約受付開始
2021年7月10日	ワクチンの供給目途が立たないため、8月9日以降の接種開始となる旨、国から連絡
2021年7月12日	8月14日から接種開始とする新スケジュールで変更(追加)予約の受け付け開始
2021年8月10日	職域接種運営マニュアル完成
2021年8月25日	1回目接種分ワクチン到着
2021年8月27日	前日リハーサル
2021年8月28日	接種開始

ワクチンの供給目途が立たないため、2度にわたる日程変更や、武田／モデルナ社製ワクチンの接種対象年齢の引き下げ(18歳以上から12歳以上)等があったものの、幸いなことに、大きな事故もなく接種を完了し、当初の目的を達成できました。

また、この職域接種に関しては、広島県とも連携して広島女学院関係者(学生325人、生徒108人、教職員46人　計479人)以外に学生・生徒・園児・教職員のご家族を含む地域の方々(563人)へも接種の機会を提供し、広島女学院の存在を地域へアピールすることもできました。

最後に、この職域接種実施に当たり全面的にご協力いただいた医療法人津谷内科理事長津谷隆史先生を始め、ご協力いただいた関係各位に厚くお礼を申し上げます。

(法人事務局次長兼総務課長　松原　高己)

会議報告

第195回理事会
2021年9月24日
14時から開催。
【報告事項】
学事報告。
10月定期評議員会
2021年10月23日
10時から開催。
【諮問事項】
2021年度事業計画の執行状況について承認。
【報告事項】
学事報告。
第196回理事会
2021年10月29日
14時から開催。
【審議事項】
2021年度事業計画の執行状況について決定。
【報告事項】
学事報告。
第197回理事会
2021年11月26日
14時から開催。
【審議事項】
中学校学則について、兄弟姉妹が法人設置各校に在籍している場合、中学校入学金を減額することができることとする学則の変更を決定。
【報告事項】
学事報告。2022年度予算編成方針について　ほか。

人事

退職
○坂野　康文
宗教センター事務課主管　兼　総合学生支援センター学生課主管

寄附

1月15日受付分まで
（敬称略・順不同）

広島女学院のために
150,000円　匿名
30,000円　神子澤　悦子
25,000円　内山　節子
10,000円　槇原　優子
5,000円　栗原　百合子

広島女学院大学のために
50,000,000円　匿名
40,000円　石田　美智子
30,000円　野村　妙子

中高教育充実のため
100,000円　西川　恵子
23,874円　Hiromi Peterson
20,000円　工藤　敬子
甘川　加緒理
恵美　純子
4,849円　加藤　道子

ゲーンスホール使用感謝
1,000,000円　人間科学研究所

教育研究施設・設備の充実
50,000円　中川　章
30,000円　匿名
10,000円　匿名

奨学金制度の充実
150,000円　匿名
100,000円　井上　富紀子
30,000円　匿名

グローバル教育の発展・充実
10,000円　山地　佐和子

署名実行委員会の活動費
20,000円　前田　瑞枝

VISHバスキャッチシステム年間利用料として
118,800円　広島女学院ゲーンス幼稚園みぎわ会

広島女学院大学合同メソジスト教会女性局給付奨学金として
200,000円　公益財団法人ウェスレー財団

広島女学院報発行時期変更のお知らせ

これまで、年3回（4月・10月・1月）発行しておりました広島女学院報につきまして、来年度から年2回（6月・2月）発行することといたしました。なお、広島女学院報はホームページからもご覧いただけます。（https://www.hju.ac.jp/houjin/report/）

コチラからアクセスいただけます

ご寄付のお願い

本学院はクレジットカード決済に対応したインターネットからの寄付金募集を行っております。皆さまには引き続き格別のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。詳細は学校法人広島女学院ホームページ（https://www.hju.ac.jp/houjin/donation/）をご覧ください。

コチラからアクセスいただけます

お問い合わせ／財務課　TEL：082-228-0387

同窓会からのお知らせ

2022年ホームカミングデーのお知らせ

テーマ／集える喜び
日 時／2022年4月23日㈯　10：30～13：30
場 所／リーガロイヤルホテル広島
会 費／10,000円

2022年ホームカミングデー実行委員会

高校21	短大20	文英3	文日3
高校31	短大30	文英13	文日13
高校43	短大42	文英25	文日25

※前号で会費8,000円とお知らせしておりましたが、諸般の事情により10,000円とさせて頂きます。

お問い合わせ／同窓会事務局
TEL·FAX 082-221-1059

編集後記

新しい年を迎え、誰もがどんな年になるのだろうか、どんな年にしようかと期待でいっぱいのことでしょう。豊かな1年となりますよう祈りをもって過ごしたいと思います。園庭傍の蝋梅の花が咲き、甘い香りに癒されながらたくさんの植物が芽吹く季節を待っています。もう春はそこまで。卒業、進級を目前とするこの時期、子どもたちには今を大切に！と願います。
（幼稚園　久保木　裕子）